

## 短編「結び岩」

「与那覇前浜村（よなはまえはまむら）」に、クインというたくましい男と、ユウナという、うるわしい女が暮らしていた。

たがいの親は裕福な家に住み、顔見知りだった。そこで、ふたりを結婚させようと話を進める。

ふたりは恋人がいなかったため、親のねがいに従った。そして20歳どうしで結婚し、ともに村いちばんの働き者だと評判になる。



クインは漁師で、沖にできればサバニと呼ばれる小舟が、いっぱいになるほど魚をとった。ユウナも機織りが得意で、着物の出来栄がすばらしく、町から注文が来るほどだった。

ところが何年経っても、ふたりには子どもができない。

たがいの親は「はやく跡継ぎがほしい」と催促するが、ふたりの仲は日に日に悪くなり、困り果てるばかりだった。

3月になったばかりのある日だった。たがいの親はふたりに対岸の「来間島（くりまじま）」まで、磯遊びに出かけようを持ちかける。

村の長老に相談して、その島に古くから伝わる「結び岩」という御嶽（ウタキ）に願をかければ、子宝に恵まれると聴いたからだ。

クインの父は長老の言うとおりに、大きくなり舟を用意していた。

その日は雲は出ていたが日差しもあったので、6人は朝から舟をこぎはじめ、昼すぎによろやく来間島の岸までたどり着いた。



島に着くと両親は、クインとユウナに磯釣りをすすめた。しかし、相変わらずふたりは、目も合わさず、口もきかずに竿を垂れている。

夕方ちかくなり、あつい雲が垂れこめ、雷鳴もこだました。

クインの父が険しい顔をして、「あすの漁が心配だから、くり舟ですこし沖にでて、潮の流れを見に行く。親どうしてだいじな話もしているから、おまえ達はしばらく、あそこの岩陰で待っていなさい」と、いちばん大きな岩にを指さした。

それは長老から聴いていた、あの結び岩だった。

ふたりは親たちに言われるがままに従う。たがいのからだは離れたまま、じっと様子をうかがっていた。

とつぜん大きな雷が光った。舟はみるみる沖に向かって、進んでいくではないか。

「おれたちを残して、なぜ行ってしまうのですか」

クインはありったけの声をふり絞った。

「おいていかないで。たすけてください」

ユウナも声をあげ、舟に向かって叫ぶ。



しかし、何も聞こえないように、舟は海の彼方に消えてしまった。

「おれたちは親に見捨てられた。ここで生きていくしかない」

「こんな何もない、離れ小島でなんか、暮らしていけないわ」

「こうなったのも、子どもをつくらなかった、俺たちが悪いんだ」

「いまそんなことを言っても仕方ないわ。忙しかったじゃないの」

ふたりはそれから黙ったきり、沖をみつめ、ぼう然と座っていた。

しだいに大粒の雨がふり出し、北風がかたい岩肌を叩きつけ、白波がはげしく舞い上がる。

見知らぬ鳥が鳴き、獣のうなり声も聞こえる。ふたりは岩深くまで逃げこみ、恐ろしさに震えながら、じっと耐えつづける。



「うすい服しか着てこなかったから、このままでは凍えて、朝までに死んでしまうかもしれないわ」

ユウナはながい黒髪をかき上げ、頬に大粒の涙をながし、からだを小さく丸めた。

「だいじょうぶだ。おれが守ってやる。すぐに温めてやるから」

クインは厚手の作務衣(さむえ)を脱ぎ、鍛えあげた胸板を突きだし、ユウナの肩にそっと掛けた。

クインはユウナの背中をさすり、口から白い息を吐きつづける。

ユウナは作務衣の袖を握りしめ、クインにじっと目を合わせた。

「どうした？ 苦しいところでもあるのか？」

「いえ。これは、あなたにはじめて織った、作務衣でしたね」

「ああ。これがいちばん温かい。漁のときはいつも着ている」

「ずっと大切にしてくれたのね。ごめんなさい。わたしは、意地をはっていたんだわ。働き者のあなたに、負けてはならないって」

「いや、あやまるのは、おれのほうだ。おまえがいつも家にいないから、ふてくされていた。暮らしが楽になったのはおまえのお陰だ」



ふたりは後悔する一方で、はじめて心が通ったと感じ、かけがえのない夫婦になれた喜びをかみしめる。

「もしここで命をおとしても、あの世では仲よく暮らしましょう」

「ああ、もちろんさ。ほかに、誰がいるんだ」

ふたりは唇を重ね、嵐の音が聞こえぬほど、つよく抱きあった。

やがて嵐は静まった。空から太陽が昇り、波はすっかり穏やかになった。色とりどりの小鳥がさえずり、風に乗った蝶が楽しげに舞う。白い砂と碧い海が、朝の日差しにきらめいている。

沖からくり舟とサバニが、浜に向かって近づく。それぞれの舟には、たがいの親が分かれて乗っていた。

「ああ、神さま。わが子は無事でしょうか」と、母が声を震わす。父が岩に向かって指さし、「おい、あそこにいるぞ」と、叫んだ。



ふたりはひとつに重なり、ぐったり倒れている。

両親が岸に上がり、結び岩に近づく。するとふたりは岩陰で、たがいの手を握りしめ、おおきな寝息をたてていた。

クインの父がサバニと結び岩を、荒縄でしっかり括りつける。両親は御嶽に感謝の祈りをささげたあと、くり舟で沖まで引き返した。

※宮古民話「夫婦結びの岩」などを参考に、記者が創作しました